

学位論文題名

人格と負債

－フィジー文化の人格観に関する一考察－

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、フィジー文化における人格観を人類学的に考察することであり、それを通して、現在の人類的な人格論を相対化した新たな方法論的視点を提起することである。

人類学における人格論は、現在では人格を歴史的現実において構築されたものと見なす「人格の構築論」に代表される。その「人格の構築論」による、人類学的人格論の端緒となったモースとレーナルトの人格論に対する評価は否定的である。その大きな理由は、彼等二人の人格論は「人格を枠組み化する全体性」を前提していることにある。「人格の構築論」が全体的枠組みの代わりに導入するのは、個別的状況でその都度暫定的に構築される人格というモデルである。

しかし、このような「人格の構築論」は、モースとレーナルトのテキスト読解と、ラカン派精神分析学における主体の理論化を参照することによって、相対化することが可能であると考えられる。これは、モースとレーナルトの人格論を、「素顔」と「仮面」との矛盾としての人格という人格論として位置付けることによって示される。

人格は一方で、構造(象徴秩序)から離れて存在する本物の私という意味での「素顔」である。しかし、同時に、人格は、他方で、構造が規定する諸関係においてそれぞれが占める象徴的ポジションという意味で、「仮面」である。それゆえ、「素顔」としての人格は、「仮面」としての人格によって、自分自身を否定される。つまり、「素顔」と「仮面」との関係は、「素顔」としての人格がまずあり、その次に、様々な「仮面」としての人格がその上に重ねられることによって、「素顔」が「仮面」によって抑圧されるという関係であると考えられてきた。

しかし、モースとレーナルトの人格論は、この「素顔」と「仮面」の関係を逆転する。つまり、「素顔」に「仮面」が続くのではない。逆に、「仮面」が、遡及的に、それ以前に「素顔」があったという錯覚を生み出す。「人格の構築論」は、構造の全体性を放棄し、人格が構築される現場である現実の多様性を強調する。つまり、「仮面」を脱ぎ捨て、「素顔」を強調する。対照的に、モースとレーナルトの人格論は、「仮面」の背後があるとされる「素顔」を「仮面」による構造的効果とする。それゆえ、このようなモースとレーナルトの人格論は、「人格の構築論」とは異なる「人格の構造論」と言える。フィジー文化における人格観の考察は、以上のような理論的背景に基づいている。

フィジー文化の人格に関する、フィジー・ビチレブ島南西部沿岸に位置するソヌア地区でのフィールドワークに基づく事例研究は以下のようなものである。フィジー文化における人格 *Yalo* (ヤロ) は、二つの側面から考察される。一つ目は、人格 *Yalo* の、フィジー文化の道徳的価値観と一致した状態である *Savasava* (サヴァサヴァ) との関連性からの考察である。二つ目は、人格 *Yalo* の、土地 *Vanua* (ヴァヌア) のシンボリズムとの関連性からの考察である。つまり、人格 *Yalo* を、道徳的価値観と象徴秩序という文化的全体

性との関連性から実証的に分析することによって、「人格の構築論」における人格が示される。

Yalo は精神を意味する。つまり「素顔」としての人格である。しかし *Yalo* は、それ自体で存在するのではない。*Yalo* が *Yalo* であるためには、道徳的価値観に従った義務を適切に遂行しなければならない。そこで、「素顔」としての人格 *Yalo* は、「仮面」としての人格 *Yalo* の遡及的効果であると考えられる。

また、道徳的価値観と一致する状態である *Savasava* は、字義的には「清潔なこと」を意味するが、同時に、道徳的価値観に対する否定的状態の表現と対立的に用いられる。例えば「口実 *Ulubale* (ウルバレ)」は、*Savasava* を目的とした義務の遂行によって得られる自由 *Galala* (ガララ) と対立関係にある。*Yalo* は、義務の遂行によってのみ自由 *Galala* を獲得する。しかし一方で、義務は不自由の源泉でもある。*Yalo* が行為の選択肢の実現を阻む義務から距離を置くことによって獲得する自由が、*Ulubale* である。*Ulubale* の本来の意味は「言い訳」であり、個々人が義務を怠ることに対する「口実」である。人格 *Yalo* にとって、*Ulubale* と *Galala* は、それぞれ「素顔」と「仮面」に対応していると言えるが、本当の「素顔」になることができるのは、唯一「仮面」を完全に引き受けたときのみである。このように、道徳的価値観によって規定された「仮面」は、「素顔」としての人格 *Yalo* にとって、自由に取り外し可能な人格の属性ではない。人格 *Yalo* は、「仮面」を被ることによって「素顔」を獲得する。このことは、人格 *Yalo* と土地 *Vanua* (ヴァヌア) のシンボリズムとの関係でも同様である。人格 *Yalo* の身体観は、「仮面」としての人格 *Yalo* の一側面であり、人格 *Yalo* は、この身体観＝「仮面」を身に付けることによって、この身体観からの否定的状態＝「素顔」という人格を得る。

このような事例研究から、人格 *Yalo* は、*Savasava* と *Vanua* という文化的全体性からの何らかの程度の否定的状態（の束）として存在していると言える。この「素顔」と「仮面」とのギャップを埋める作業は *Oga* (オンガ) であり、その名詞形は「ビジネス」である。それゆえ、*Oga* としてのビジネスは、金銭を目的とした経済活動としてのビジネスとは違い、フィジー文化が規定する「仮面」としての人格を目的とした活動である。

このように、フィジーにおける人格 *Yalo* は、*Savasava* と *Vanua* という全体性が規定する「仮面」としての人格と、「仮面」を脱いだ本物の私という意味での「素顔」としての人格との矛盾として捉えることができる。人格 *Yalo* の日常は、この矛盾を処理するための相反する二つの運動である。人格 *Yalo* は、一方では、「仮面」を引き受けることによって、この矛盾を処理しようとする。つまり、義務の遂行である *Oga* の実践であり、同時に、*Oga* の放棄として「仮面」を脱ぐことによって、この矛盾を処理しようとする。このように、人格 *Yalo* は、「素顔」と「仮面」との矛盾として存在している。

「人格の構築論」は、モースとレーナルトの人格論における人格の「素顔」と「仮面」との矛盾を理論的行き詰まりの原因と見なし、この矛盾を放棄してしまった。しかし、本論文でのフィジー文化における人格 *Yalo* の実証的考察によれば、人格は、「人格の構築論」が主張するように構築されたものではなく、構造の効果としての「素顔」としての人格と、構造が規定する「仮面」としての人格との間の矛盾を内在化させた存在であり、構造との間の矛盾とその克服を繰り返す弁証法的運動体である。

「人格の構築論」は、構造の全体性を重要視する構造主義が取り込むことができていない文化的ダイナミズムの源泉を、構造の外部にあるとされる現実を求めるという立場であり、一般的には、ポスト構造主義（非本質主義、構築主義）と呼ばれるものに含まれる。本論文の人格論に関する理論的・実証的考察は、現在の文化研究の中心的役割を担う、このようなポスト構造主義的分析方法の限界を示し、それが相対化可能であることを示している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 武 公 夫

副 査 助 教 授 小 田 博 志

副 査 助 教 授 浅 見 克 彦

学 位 論 文 題 名

人 格 と 負 債

－フィジー文化の人格観に関する一考察－

論文審査委員は、以下の経過および内容で論文審査を行った。

第1回審査	平成14年12月13日	論文を審査委員に配布、日程調整
第2回審査	平成15年1月31日	論文内容の審査、問題点の検討、日程の調整
第3回審査	平成15年2月7日	口述諮問
第4回審査	平成15年2月7日	口述諮問の結果及び審査内容の検討、可否判定
第5回審査	平成15年2月13日	報告書の作成と点検

本論文は以下の6章から構成されており、各章の構成、内容について各審査委員による以下のように詳細な審査、検討が行われた。

第I章では、研究目的としての人格論と、フィジー文化研究の概要および、先行研究の紹介と、理論的・方法的枠組み、フィジーの調査地に関する概要がのべられるが、先行研究の検証をはじめ、理論展開は明快である。第II章では、「構造主義」と「ポスト構造主義」という、人類学における理論的争点を、ソシールにおける「言語のアンチノミー」に類する問題に対する二つの解決法として位置づけ、構造（象徴秩序）に対するポスト構造主義的な解決としての「多様性としての主体」を克服する、「根源的否定性としての主体」が、「第3の解決」として示されるが、理論的論証も妥当で明快な理論展開である。第III章では、モースの贈与論の再検討を通して人格と負債の問題が検討される。フィジー社会において人格は、「負債を内在化した人格」と「負債を内在化しない人格」の矛盾としてあらわれることが事例を通して分析されるが、この部分も理論的、実証的に破綻無く記述されている。第IV章では、フィジーにおける人格とシンボリズムの問題が、人格 Yalo と土地 Vanua の関係を通して考察される。土地と結びついた木のシンボリズム (Treeness) によって象徴秩序に帰属するフィジーの人格は、負債を内在化する一方でその象徴秩序を積極的に引き受ける存在として現れる事が事例研究として述べられる。第V章では、外来王神話 Tabua 神話に対する、サーリンズとトーマスによる神話分析を、「構造主義的解決」と「ポスト構造主義的解決」に基づくものとして再検討し、これらが「仮面」と「素顔」という人格論における対立として再解釈可能であることを明らかにしている。そして、これらの対立を調停する解決法として、モースの人格論の再評価の必要を提起する。この部分の理論展開は妥当だが、用いられる資料の整合性に更なる検討が必要だとの意見が出された。第V章では、これらの議論の全体的なまとめが行われる。人類学における「人格の構築論」は、「仮面／素顔」「外部／内部」「構造／歴史」といった枠組み

そのものを前提とすることによって成立するもので、それ自体が「言語のアンチノミー」によって構造に媒介されるという悪循環に陥っている。これらを克服する「人間の現実を全体に枠組み化する」ものとして「第3の解決」が提案される。この部分は、文化研究に新たな方法論的視点を提起するもので、理論的、実証的にすぐれたものとして高く評価される。

以上の審査結果から、本研究における、人類学、精神分析学、歴史学における先行研究のテキスト読解と批判的検討は妥当なもので、その理論展開はすぐれたものとして評価される。しかし一方で、事例に取り上げたフィジー文化の資料は限定的なもので、その資料をフィジー文化に敷衍する妥当性には今後検討の余地が残されており、西欧社会における人格とフィジーにおける人格 *Yalo* との整合性を求める際にも、さらなる研究の進展が求められる。しかし、杉尾氏の人格論に関する理論的・実証的研究は、従来の本質主義（構造主義）に対する非本質主義（ポスト構造主義、歴史主義、構築主義）という議論が、実際には「言語のアンチノミー」における二元論的解決に基づいた裏返しの議論であることを明らかにしており、フィジー文化における人格論の人類学的再検討によって、人格論にとどまらず、現代における「文化」の实在性と虚構性をめぐる否定的状況に対する新たな方法論的視点を提起している。このような研究は、人格論にとどまらず、従来の文化研究における分析方法を相対化する可能性を示している点でも、高く評価できるものと考えられる。

本論文は本文 360 枚、Notes 75 枚、Bibliography 5 枚、400 字詰め換算で計 440 枚) 以上からなっており、その論文内容とともに量的にも博士学位論文に値すると考えられる。以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本研究を博士（文学）に相応しいものと認定した。